

Title	シュテファン・ゲオルゲ研究 : 伝記(3)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 12 p.17-p.35
Issue Date	1962-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80205
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

シュテファン・ゲオルゲ研究

伝 記 (3)

八 木 浩

Stefan George

— Sein Leben (3) —

Hiroshi Yagi

Umriss

Das wichtigste Erlebnis Georges, das Maximin-Erlebnis, war lange verhüllt. Aber man kann es heute objektiver mit genauen Zeugnissen und Daten erklären und als für unsere Zeit und Zukunft elementar Wichtiges wiedergeben. Obgleich das Kultische in George für uns unnachahmbar ist, ist es in der Gegenwart am wichtigsten, die Würde des Körpers und der Jugend heilig zu empfinden und richtig zu verkörpern. Man kann dieses Erlebnis nur aus der Seite seiner Werke klarmachen, aber hier wird versucht, es aus seinem Leben biographisch zu beschreiben.

Zweitens habe ich über seine Freundschaft mit Friedrich Gundolf geschrieben. Diese Freundschaft, die als Jüngertum des George-Kreises bekannt ist, ist mit dem Maximin-Erlebnis Hand in Hand gegangen und nicht weniger charakteristischer und tragischer als dieses. Ich habe das Leben Gundolfs hier auch biographisch studiert, weil man damit sehr viel über George selbst erkennen kann. Ich hoffe, dass diese zwei wichtigsten Tatsachen im Leben Georges in dieser Zeit, wo vieles abstrakt geworden und vom Körper abgefallen ist, wieder richtig anerkannt werden, und dass wir die göttliche Kraft in uns und in der Welt ewig frisch bewahren können.

「私は歴史の中でこのように、同時代人、殊に若い人に影響した人を一人だけ知っている。それはソクラテスである。彼が生きている時に生きることを恵まれたこと、それが常に私を驚きで満たした。このことは、私にとっても他の人にとっても変りはない。そして彼らを一つに合わせたものは、命題や誓いではなくて、一人間に対する愛であり、驚嘆であった。」とペーリンガーは書いている。このように若い人々に愛され、また、彼らに影響するということが、中年以後に見られるゲオルゲの特色であった。1900年を過ぎたゲオルゲはこうして一転機を迎えた。このような変化をひきおこした直接の動機となったのは、クラークス・シューラー事件と、それに続いておこったマキシミン体験である。「われわれは今まさに、われわれの生の正午ともいうべき山頂をふみこえた。そして近い将来をみつめて胸騒ぎを覚える。」と「マキシミンへの序言」に書かれている。ゲオルゲの生の半ばは、同時にクライスの生の半ばであった。これからクライスは別の、より崇高な斜面に移行するのであるが、このような未来の大きな使命を自覚するにつれて、彼の人生にみられる大きな特色といえる閉鎖性がより強くなっていく。未来に対し積極的であればあるだけ、自分を不確実な効果に投ずる危険から身を守らねばならない。どのくらいの範囲かわからないが、彼は昔の手紙をとりもどしたりした。自己を報知することを拒む意志は増々強くなるばかりであった。彼はただ身辺に身近かな者を置き、一二の特定の友と詩や人生の一定事物について語りあう。中年以後のクライスも、これらの身近かな人々のことにすぎない。このような閉鎖性には、いろいろ心理的解釈が加えようが、それらは無益なこととなるであろう。ただはっきりいえることは、こうして詩人は、人々からの誤解を避けようとしたのであった。1905年10日にヴォルフスケールに次のように書いている――

おお兄弟たちよ 親しい人々よ

本当に君達ですら私を

誤解したりするとは、

身辺の人ですらゲオルゲを誤解していることが多かった。彼について幾つもの伝説がひろがっていた。ミュンヘンではヴォルフスケール家でバックス祭が祕密で行われたとか、ベルリンではろうそくの火で詩の朗読がびろうどの間で行われたとか、ハイデルベルクでは公園に詩人が夜中に幽霊のように浮かび出て消えたとか、そういう噂のみがまことしやかに伝えられたのである。人々は、ゲオルゲのまわりには人間らしさ以上のものが漂っている、と考えた。なぜ名詞を小文字で書くのだろう、なぜあんな帽子をかぶるのだろう、なぜ選民のように振舞うのだろう、という風にささやきあった。詩人の孤高さは、それほどまでに当時の世相からかけはなれていたのである。彼は本質的にこの時代から遠かった。そして人々は変っていることにしか注目しなかったのである。この変っている、ということがしかし、変っていないということになるような時代で

あったから、詩人は彼らとの距離を縮めようと考えず、より冷静に、より閉鎖的にならざるを得ない。しかし、若い魂がこの詩人の前に現れるや否や、あらゆる伝説は一度に消えてしまう。例えばザーリンはのべている。「すぐれた作品に接してみると、気高かさを感じるので、自分の活動的なものが甦ってくるように思う。だがそれを創造した人は、それよりもっと強大である。時間を超えた魂が、自己を時間的な形式にした詩作品よりも、詩人自らはもっと強大なのだ。」中年のゲオルゲの写真は、除々に動くゲオルゲのデーモンをよく表現している。孤高で閉鎖的で不動になった魂が、積極的に働きかける力に満ち、目は光明にあふれている。それは何物をも見抜く予言者の眼光をおび始めると共に、正しい者にとっては深い愛情のように感じられる。深い愛にふけっている時もあれば、胸底深く魂を鋭く宿している時もある。ザーリンは1913年5月にゲオルゲとすれ違った時の印象をしるしている。ひとりでゲオルゲが軽い足どりして近づいてくると、みんなが側によけて遮らぬようにした。若い彼の心はときめき、目は釘づけられた。人々の間をいくこの男は神の気高さにあふれ、人々は影のようにみえる。稲妻のように人の内面をかすめる視線、蒼白な頬、軽やかなほほえみ、のみでほった顔立ち、詩人は小さい杖をさげ、奇妙に大きな帽子をかぶっていた。感動した彼はその人を追うた。……このようなザーリンの記述には、学生時代の、しかも帰らぬ大戦前の息吹きがかよっている。古風な建物と文化、古い橋と城と舟、魔的な自然をもつ、浪漫派の本拠であるハイデルベルクでこそ、このような話がまことらしくきこえるのかもしれない。第一次大戦前のハイデルベルクは、神秘的ドイツの神秘的首府というべきだった、とザーリンはのべている。

彼の一日の歩みは大変規則的になっていく。彼は朝早く起き、朝食後一二本の葉巻を巻き、あちこち歩き廻り、時に語り、時に詩句を読んだ。食事は良いものをとったが、量は過ぎさない。そして昼食後は一二時間寝るならいであった。それから茶を飲み、よく訪問客とあい、対話を交え、夕食近く迄そうすることが多かった。だが本式の会話は夕食後であった。晩年に近づくにつれ疲れやすくなり、早く休むようになる。「10時を過ぎるとたわごとをいうにひとしい」といった。会合の折、ヴォルタースがもっと止って飲むようにすすめると、戸口を去りつつ、「君達が口でいつもいっていること、節制（Zucht）を施すのです」と答えた。グンドルフが上等の酒を一口でのみほすと、「この子はやっぱり野蛮な子だな」といい、香りを味わいつつ、ゆっくりと一口飲み、ビンゲンの故郷の試飲の話をした。食事も酒も煙草も、よいものをわづかに味ったにすぎない。時間を彼は厳格に守った。彼が用いるものは、他人が用いるものと変ってはいなかった。誰かが不精密だとか、なげやりだとか、よく忠告することがあった。手紙では正確無比な字を要求し、明確でない字はすぐとがめられた。ヴォルフスケールはあるときこんな面白い手紙をもらった（Schonauer）：「カルル・ヴォルフスケールが友人たちに読める字を書いてくれるよ

うに、という願いなのだが、それがかなえられる満足な円満な方法がないので、——（悪い字体で関心の深い受取人に大へん神経をわづらわし、大へん大事な時間を喪失し、またこのようなことで大きな文学財が永久に利用されなくなるということにかんがみ）——当書簡に署名したベルリン受取人協会は次の取決めを行った。a) a e n m の高さの字が 3~4 mm の高さを持たない、あるいは l p k の高さの字が 7~8 mm の高さを持たないヴォルフスケールの手紙は、発送者に返却すること。正確な見本としては、ヴォルフスケールがもっとよかった時期に書いた当方保管のものがああります。b) 協会金庫から次の様式の書簡紙数百枚を彼に寄贈すること。ただしヴォルフスケールはこれを協会同人あてにのみ使用すること。この紙の様式は、いくら字が高くともびがあっても、いくらひろがっても構わぬもので、かつ同時に政府の定めた郵便料をこえないものであること。c) 協会からのこの厳しい処置は筆記者ヴォルフスケールのみにとられるもので、人間ヴォルフスケールには、昔ながらの愛と忠実と尊敬を捧げるむね説明しておくこと。」このようなユーモアで忠告される場合は例外的であり、他の若い人々は、「一度手稿のいやらしい爪を改めたらどうです、今こそその時ですよ」といわれる調子だった。詩人はこのように、晩年になるほど厳しさと用心深さを加えたのである。ザビーネ・レプシウスにあてられたゲオルゲの書簡を見ると、ただただ驚嘆する他ない厳格な文字と文体である。一体こんな手紙を書いた人が歴史にあるであろうか。彼はしかし大変活動的で、多くのことをした。だから死に近いころ、このようにいったのである：「私が何もしないからといって驚かれるでしょうが、以前にはたくさんのかことをしたのですよ。」実に彼の生活観は実践的であった。彼は本の装釘も自分でし、酒をうまくつぎ、料理にもたくみであった。彼が自ら灼いたことについて、ザビーネ・レプシウスは面白くしている。地図とコース書きをいつも手に、旅を続けた。昔は切手を集めて、それで食っていけるほどだったという。結婚もせず、職もなく、非実務的に、原始宗教の物乞僧のように生きたと考えるのはまちがいで、多くの生活苦を自らなめたのであった。このように孤高で、規則的で、かつ実践的である、という身辺の変化につれて、世界観もゆっくりとだが動いていく。もはや中年以後のゲオルゲには、芸術至上というような考えの可能性はなくなった。芸術よりも人間、美よりも人生が明らかに重大視される。このような除々の動きは、作品からもよく伺えるのである。ゲオルゲの世界観は元来ははっきりとは把えがたいものだった。カトリックと異端とが、異様なグノシス派的な要素と共に(ジャイメ)、不思議に混在しているようであった。にもかかわらず1900年に、「人生のじうたん」が出て、予言的な文学に入りこんだ時、ヨーロッパにおける新カトリック文学が生まれた、という風に考えられたりした。しかしゲオルゲは決してカトリックなど考えてはいなかった。彼には教会の分派のようなところは、中年にも晩年にもなかったのである。強いていえば、キリスト教と異端との融和のようなものであった。ゲオルゲが敬虔であるの

はたしかだが、信仰を固定する人ではなかった。ただいえることは、ザビーネ・レプシウスもいう通り、完全な反ルター的信仰の持主だった。プロテスタンティズムが彼を動かしたことはない。彼は神にいやされる可能性ではなく、仕事と行動そのものによる聖化を考えていた。だから彼は、ボードレールやヴェルレーヌ風に後悔する罪人タイプではない。自己陶冶によって罪をさけ、神聖なものの告知者でありたいと思うのである。一般に彼の宗教性は此岸的なもので、この点ではゲーテ的だともいわれる。

詩集「人生のじうたん」では天使が裸形で出現する。リルケの不可視的な天使とは違った、輝かしい、目に見える、しかも論理的な天使で、美しい人生という喜ばしい福音をもたらす。諦めや現実欲によって動かされず、精神と肉体のあらゆる力の総合によって生きよ、というヘラスの魂が、苦悩によってかちとられんとするのである。そのような姿が、詩集「第七の輪」では、現実の人間となってうち出されてくる。ピタゴラス派ではコスモスのハーモニーを、ダンテでは天国（第七圏）を、神学では至福の数をあらわした七という数を使って、七書からなり、各書の詩は七の倍数であり、しかもマクシミンのスペルが七であり、詩人の七つ目の詩集であるといわれる詩集「第七の輪」で、マクシミンの占める地位は一にして一切というべきものである。しかしこの詩集ほど疑惑をもって見られたものはなかった。マクシミンという青年は、実際存在した人物ではなくて、論理を詩に移したのにすぎないのではないか、そうとすれば瀆神不敬のそしりをまぬかれえないではないか。それにしても人間関係をこんなに神秘な意義に迄高めるとは、甚だしい浪漫主義といわれても仕方がないのではないか。ゲオルゲをめぐる、Kult(崇拜、礼拝)思想が、こうしていつまでも問題性をおびている。しかし第二次大戦中、1937年にアドルフ・ビュルデケ(Adolf Bürdeke)が、チュリヒで、この若死したマクシミンという詩人の詩と日記を発表して以来、マクシミン体験ははや秘密ではなくなっている。彼はミュンヘンの人で、マクシミリアン・クロンベルガー(Maximilian Kronberger)といった。最近の研究では、ゲオルゲの人生体験がいろいろ明るみに出てきた。あの名詩集「心の年」もイーダ・コブレンツとの恋愛なしに成立しえなかったとみられるし、「第七の輪」の「潮汐」(Gezeiten)もグンドルフとの関係から生じたものであった。どうやらあれほど芸術の絶体性が主張されていたのに、根には体験が横たわっていたのであり、ただゲオルゲは、写実性や告白欲をひどくきらい、それとの大きな断絶の意志を技巧でささえ、完全なクンストとして鍛えあげたもののようである。しかし風変りな詩人の資料絶滅の意志にもかかわらず、歴史はその秘密をあばいてしまうのである。

1902年の始め、ゲオルゲは14才のマクシミリアン・クロンベルガーをした。クロンベルガーは最初の出会について書いている：「レオポルトシュトラッセでしばしば出あったことのある人が、すでに大分前から私の注意をひいていた。この人はかなり大きく、そり身で、右肩が

少し左肩より高かった。彼の頭部は最も興味をひいた。額は高く、鋭い目はややくぼんでおり、鼻は美しい形で、口は通常かたく結ばれ、あごはやや前出し、骨は大体鋭く露れていた。長くて黒い、うしろに流れる、絹のように軟いふさふさした髪であった。ふだんは黒いマントをまとい、暗色のジャケット、灰色のズボン、はめこみ付の頭部のある杖をさげ、かなり高い帽子をかぶっていた。私の友人、ハンス・ブラウンは十一人の死刑執行人の一人だと主張した。信じないわけもないままに、私もそうかと思っていた。」すばらしく緻密な筆つきのこの子を、どこからどうしてみつつけてきたかはわからない。クローンベルガーは更に書いている：「2月か3月かのある日、妹ハンナとその友人E・Sと家の前にいた時、この人が私の前に歩みより、大へん興味があるので私の頭部を素描してよいか、と尋ねた。私はもちろん許した。次の日、日曜日であったが、まづハンナと三人であい、それから二人だけになった。彼は私に、写真屋にいこう、私の写真をとりたいたから、といって写真をとり、私にもあげると約束した。それから二人で家に帰った。彼は私に、何か得意があるか、と尋ねた。私は少し詩を書いていたが、そんなことはいわず、自然学が好きだという口実でのがれた。彼の名を尋ねると、シュテフェン・ゲオルゲということであった。これが1902年の最後の出会いだった。そののち写真はこなかったし、すっかり彼のことを忘れていた。」青年はそののちこの人が詩人であることを知って、クラークスのゲオルゲ論をも読んだが、殆んどわからなかった。われわれはここで、ゲオルゲとホーフマンスタール、あるいはグンドルフ、あるいはコメレルやシュタウヘンベルクとの出会いなどをどうしても連想させられるが、クローンベルガー自身は決して奇蹟的な天才ではなく、新鮮で潑刺とした、しかもつましい一青年というべきであろう。ゲオルゲはこのような素朴さと、若い美しい男らしさがすぐれた人格に成育する、と感じて、魅せられたものと思われる。1903年1月、路上で再会、それから青年は詩人を規則的に訪れた。彼はゲオルゲに詩をみせ、ゲオルゲはそれに真剣に立ち入った。そしてこのころゲオルゲは彼に、マクシミン詩集の次の二つの詩で答えたのである（この詩は「応答」と題されて、三つの詩を含む。）

奇 蹟

乱れ髪して君はなお

禁域を昇るのか。

神の啓示を希うのか。

見よ神は降り働き

焰となり 塵を抜く。

世の民の上で君のこうべを

光で神はふきめぐらし、
花環をもった天使が見え
若い夢の宝庫の前で
祈るようにして下さる。

夕の流れ雲は神の手を
丸いやかたにかたどって
やさしい炎をみたしている……
今や至上の奇蹟がおこる。
愛と愛とが共に流れる。

入 門

たとへ君が暗い谷間に失神し
高所から沈んでも一
今あるままに選ばれている、
あらたな国を見るために。
君は源泉の水を飲んだ一
いざひらけた野辺をふむがよい。
薫咲く草原にこがねの穂は波うち、
燃えるかと ばらで覆われた
森の祭壇……空間は
ふるえる温かな光にみち
つねにひびく天使の歌。その口は
君の口に燃えて君をきよめ
君は神聖な土にとどまる。
ひざまづき そして祈れよ。

いよいよゲオルゲは青年をヴォルフスケールの家に導き、仮装行列を共にしたり、散歩したりした。常に学校でよく学ぶようにすすめ、ギムナジウム卒業の意義をといた。両親にも、自己自身にも、ゲオルゲにもそうすべき義務がある、というのであった。4月にはグンドルフを伴って堅信礼に出席しているが、そのころクロンベルガーが約束時間をたがえたために、ゲオルゲは気嫌をそこね、余り出会わず、詩を送りかわすだけのときが多かった。12月にゲオルゲは彼に來

訪をうながし、文学と芸術を語った。1904年1月も出あうたびにゲオルゲの気嫌がわるく、言葉かすも少いし、応待も不精不精にみえた。原因は、ゲオルゲが会うように定めたときに、クローンベルガーに支障ができるところにあった。「私はいった、あなたのいうことはまちがっています、私には時間がないのですから。すると彼は私の方を向いて、額にしわをよせ、指でおどした。それから机に向き直り、来る時間か意志かがないなら、自分もあう時間や意志がない。すきなきにすればよろしい、と結んだ。私は冷然と **Adieu!** といって、手をさし出したが、彼はふりむきもしなかった。それで私は烈しく手をひっこめ、さっさと足をふんで部屋から出た。」そののちゲオルゲは道で出あってもかたくなであった。殆んど他人に対するようだった。それに立腹したクローンベルガーは一切の自分の作品の返還を求めた。それに対してゲオルゲは、クローンベルガーの父のもとに来て、あやまった。それから和解となった。…これもまたホーフマンスタールとの場合と大へんにており、ゲオルゲが烈しい感動にゆるがされ、エロスにひきゆかれるさまが伺えるのである。このころゲオルゲはザビーネ・レプシウスに、プラトン、ダンテ、シェイクスピアの、性をこえた愛について話している：「人間が発展すればするほど、目的のない愛に傾こうとするものだ。」

ゲオルゲはミュンヘンで毎年仮装行列を行っている。1904年2月14日にもその祭りがあり、ゲオルゲはダンテに、ヴォルフスケールはホーマーに扮し、自作の詩や訳詩を朗読した。この時はすでにクラークス、シューラーがいない。その代り月桂冠をつけ、フローレンスの貴族の子になってクローンベルガーが、赤一色にまもって登場した。写真でみると、目と眉の美しい、総明のような青年である。彼はこのときのことをやはり日記に書いている。九時半にハイゼラーの家に行った。行列後ヴォルフスケールは自作の詩を読んだ。それからヴィリギリウスのラテン語のオーデを読み、ゲオルゲはダンテの訳詩を自ら読んだ。一時間四十五分してゲオルゲは、彼を家まで送りとどけた。翌日ゲオルゲは、ダンテとなってかむっていた冠の月桂樹の枝を彼に送った。ショーナウアーのいう通り、このダンテ行列はゲオルゲにとって、決して謝肉祭気取りのものではなかった。それは未来の新しい詩精神の表現なのである。1900年ごろからダンテにひかれていた彼が、浄界第一歌を読んだのも注目に値する。ここでダンテはミューズを呼びよせて、最高のミューズ、叙事詩のミューズ、カリオペに祈る。これは厳しい清めのときなのである。この行列があってもまもなく、ヴォルフスケール家で芸術草紙第七巻の出版が祝われた。3月24日のことだ。この日もマクシミンはグンドルフやゲオルゲと登場、詩人行列をくり返して詩を読んだ。この二回の祭りに、ゲオルゲは自ら冠をあみ、青年に与えた。いかにゲオルゲが彼を遇したかがわかるのである。実際のこの青年の詩は14才の子の作とは思えぬほどのできばえであった。

幾千の年が流れて

自由な刹那に近い。

すべての鎖は破れ

広く裂けた土から

若く美しく新しい

半神がたちあがる。

例えばこの詩は、最後のゲオルゲの詩集の中でモットーに使われているほどである。ゲオルゲが神のように賛えたこの青年は、なるほど奇蹟のように意味深い詩を書いていたのであった。ハンナ・ヴォルフスケールの語るところでは、この祭典の時ゲオルゲは、黒いリラの花を一ばい抱えてやってきた。「きれいでしょう」というので「きれいです、何に使うのですか」ときいてみた。「この花は、壁にかけるとはよいが、生きている人にはあげない花ですよ。これは死人用ですから」といったところ、ゲオルゲはひどく驚き、すぐに持ち去った。彼はこれをクローンベルガーに与えるつもりだったのだ。クローンベルガーはこの祭りののち、すぐウィーンの親戚を訪い、3月30日に数日ウィーンにいたゲオルゲをも訪ねている。4月10日彼は頸部硬直（脳脊髄膜炎の徴候）の病いをえてミュンヘンにかえり、4月15日、16才の誕生日ののちに他界したのである。彼の詩にはそれを予言するかのようなものもある：

おお永遠の神は 一切を恵み

無上の喜びも完結した。

今や私を天上の完成にと

永遠の胸にと 召したまえ。

すでにシューラー、クラージェスと別れ、著しい痛手を蒙った詩人が、この時いかに悲しんだかはいう迄もない。ザビーネ・レプシウスは、誰かしらぬが、重大な友が死んだといったときのゲオルゲの様子に深淵迄ひきさらわれた、とのべている。ハンナ・ヴォルフスケールは、青年が死んだ時に、ゲオルゲがこれに耐えて生きられるとは信じられなかった。最美の、求め続けたものを遂に見出し、それを急に失ったこの時に、彼女は詩人と死んでもよいと思ったほどであった。ゲオルゲの写真にはその苦痛がはっきりと刻まれ、またその詩にもその打撃が精細に描かれている。5月14日にはハンナ・ヴォルフスケールにあててこう書いている。「ずっと仕事も決断もつかぬ日々でしたが、漸く体は回復し、魂は一週一週苦悩の別の年輪に入っていきます。」またザビーネ・レプシウスはのべている：「しかし彼の強い自然は、破壊的な狂気の力によく耐え、それに対抗し地上の使命を貫徹するのであった。」実にこの体験は、詩人の生涯の中核であり、充足であって、マクシミンこそ、彼が生き始めた日から探してきた存在であった（den ich suche, seit ich lebe.）。だから1906年、ゲオルゲは特輯号（Maximin, ein Gedenkbuch）を出したので

あった。そしてクライスの同人には、次のような要求が送られたのであった：

遠方を夢見 目を濁らせ
もう聖域のことを思わずに
空間に終りの息を感じとる。
だが頭をあげよ 至福の時だ。

君達がひきづる冷い年に
あらたな奇蹟の春がきざし
花咲く手で髪に光を巻いて
神が出て 君達の家を歩んだ。

喜び抱け、長く返らぬ美を
心痛め恥ぢるには及ばぬから。
君達もまた神が呼ぶのを聞き
神の口が君達に口寄せたのだから。

日々が満たされずに過ぎていく と
もう嘆くな、君達も選ばれたのだ。
一人の神を生んだ町をほめよ、
一人の神が生きた時をほめよ、

このような詩で、形式や形姿に対するゲオルゲの昔ながら信念が、始めて本来の姿をあらわした。芸術においてフォルムであったものが、人間においてマクシミンとなったのである。このときからゲオルゲの詩はヴェールをとり去り、神に近づいた。マクシミンは青春が最も美しく花咲いている時の力にあふれ、この *Zauber der Frühe* はそのご30年、ゲオルゲにつきまとうこととなった。詩人の若い友人がこの間に範としたのもこの若い姿であった。こうしてゲオルゲが自分に結びつける人間の類型は変わったものとなった。新しく交替し始めた若い友人は、ゲオルゲをマイスターと呼ぶようになる。そして彼らは必ずしも詩人ではなくなり、学者であり、裁判官であり、教師であり、その他さまざまであった。彼らは各々の個性を生かして作詩したのであったが、次第に詩作数は減少し、草紙が出る回数もまれになり、詩人は若い人々と会談し、人生と詩を語った。このようなことを考えると、マクシミン体験は、立派な詩のためには全力を、という考えから、立派な人間のためには全力をという考えに変わっていくかなめにあたっている。詩作は

否定されたかのようにすらみえる。詩はしかし、よりよい人間のための単なる一手段、しかも最もすぐれた手段と化したのであった。ゲーテはイルメーナウという詩で大人（Mann）の世界を強調、Mann の義務を知ったが、ゲーテのシュタイン夫人における役をマクシミンが演じたともてもよい。なぜ完全な青年が、より芸術的な世界によりも、より客観的で実務的な世界に詩人を駆り立てるかといえば、それは完全さというものが、詩人にあるとは限らぬからである。マクシミン体験は完全な芸術の根源としての完全な人間を教えたのである。この典型から詩人の交友関係や詩作がいろいろ分岐していく。この根源は炎のようであって、短命で、非具象的であり、自己自身の中核と化すほどである。それがやがて次第に客観化し、クライスに、更にドイツにと、ひろがっていく。トーマス・マンの「ヴェニスに死す」は、マクシミン体験のパロディーではなかろうか。ここでは具体的に心理的に、距離をおいて書かれているが、その姿はマクシミン＝ゲオルゲの場合と大変違ったものである。ゲオルゲは美と真に溺れていない。双方の緊張は充足的で、青年が死に、老人が残って仕事を続ける。そして美の創造のみが仕事なのではない。一切の根本である人間の教育から出発せねばならないのである。ヘルマン・ドラーンは、ニーチェの超人思想にあるような、またどの神秘的な宗教にもみられるような、宗教的個人主義が、ゲオルゲの愛の宗教で克服され、宗教的な共同感が再び呼びさまされた、とのべている。ここではあらゆる神的なものが人間の中と人間相互の間にある。何物も彼岸や物質の中にはなく、神自身は人間の生の中にある。ただし人間はその場合、合法性と価値とをしっかりと形成していなければならない。このようなドラーンの見解は、ゲオルゲとカントとの案外近いところに注目したものであろう。さらに私達はまた、ジャイメの所説のごとく、異教とキリスト教が実際に対立するものではなくて、神の力への同一信仰の異った段階であることを、マクシミン体験から読みとりうるであろう。人間の中の神的なものの新しい出現というのなら、アポロでも、キリストでも、ブッダでもえらぶところはないではないか。これをE・R・クルチウスのように、私はキリスト教徒だからゲオルゲの考えにくみせないというのは、いかにも偏狭である。最後に私達は、ニーチェの超人に比して大変敬虔なこの思想を、忠告として、義務としてうけとるべきである。人間性がこのようにひづめられた戦争のあとで、われわれがいかに生きるべきかは、この思想からおのづから明らかである。そして特に強調すべきことは、この思想が大衆運動や政治と何の関係もないことである。ドグマをさがし、権力政治にこれを持ちこんで、暴君をあがめるようなことにならぬように、常に私達は警戒を怠ってはならない。われわれはただわれらの時代に欠けている青春の力を得なければならぬ。今こそわれわれはそれを求めているのである。

マクシミン体験と比肩することはできないが、グンドルフとゲオルゲの交渉は、詩人と若い人

々とのマクシミン影響下に開かれた交りの中でも、最も重大で典型的なものであった。フリードリッヒ・グンドルフ(Friedrich Gundolf) は本名をフリッツ・グンデルフィンガー (Fritz Gundelfinger) といったが、ゲオルゲに名を与えられてからその名を用いている。1899年4月、19才のとき、彼はヴォルフスケールのもとでゲオルゲと相识り、その後25年の交友が続いたのである。そして1931年7月12日、彼の崇拜する詩人ゲオルゲと英雄シーザーの誕生の日死去した。

グンドルフのゲオルゲに対する関係は最初から畏敬の念に満ちたものであった。1901年1月にグンドルフはこう書いている：「私は現在の生活では本当にあなたにしっかり結びつけられており、あなたが私に与えてくれないような義務は一つとしてありません。」またマクシミンの死に際しては全身から追悼し、共鳴し、ただゲオルゲの悩みを和らげようとしている：「昨日私は、神聖な悲しみに満ちたあなたの手紙に対して、数行の詩句のほか何も送りたくなかったのです。私はまだわれわれの唯一者（マクシミン）の不思議な詩については話す気にもなりませんでした。その歌は今や至福の甘美な声のように、二重にも三重にも感動的に墓地からわれわれの灰色の日々に向かってひびいています。これらの日々は光輝ある日々といえます。そして若い憂愁と憧憬に富む魂からのみ完全に理解されるものです。あなたが彼を見出すことが許されて、しかも失わねばならなかったという宿命を考えるにつけ、私はまたもや泣かざるを得ません、わが師よ、それもあなたのための涙ではありません、私自身のためなのです。私はといえば、余りにも早くいつわりの慰めをえて、どれほど神聖なものが私の道をよこぎったかは、ごくゆっくりとしかわかってこず、今や私がとうてい彼に値いせぬ存在であったということがわかってきて、自分の盲目さに対して、余りにもおそまきに悲しみを覚えています……(1905年1月)。」グンドルフのこのような情熱にゲオルゲも答えて、詩集「潮汐」(Gezeiten)に収められている八篇の詩を集めて、自ら装釘してグンドルフに捧げた：(DIESE GEDICHTE / DEM GETREUESTEN / FRIEDRICH GUNDOLF ZUM ANDENKEN / IM JUNI 1907 STEFAN GEORGE)。こうしてゲオルゲは何年間もずっとグンドルフを伴侶として日々をすごした。二人は快活に真剣に仕事について語り、散歩や食事をともにした。ゲオルゲはそこそこグンドルフの故郷ダルムシュタットで日をすごすことも多かった。グンドルフはゲオルゲの代りに手紙を書き、緊急の仕事の面倒を見、クライスからは遠い人々との面会の労をとり、常にシラーのゲーテにあてた言葉、すぐれた人に対しては、愛を捧げるほかにどんな自由もない (Dass es dem Vortrefflichen gegenüber keine Freiheit gibt als die Liebe) という句をモットーとして生きた。彼が道をいくと、学生たちは、そらシラーがいる (Da geht Schiller) といったそうである (ザビーネ・レプシウス)。日々の会合や協同で多くの教えをうけたグンドルフは、1909年の手紙でこう書いている：「ゲオルゲが現今人々や国民や青年と語る新しい響きのもつ、裸の、深い、豊かな人間味に、私はいつもあら

たな感動をおぼえています。何という善意の山、何という悲喜こもごもの厳格さでしょう。この自信のある、寛大な節度と巨匠ぶりを見出すためには、われわれは老ゲーテまでさかのぼらねばならないのです。」グンドルフはこのような生きた魂（*der lebendige Geist*）に仕え、それをモットーとした。ゲオルゲの目にもグンドルフは、最も才能ある若者として映った（“*So ein begabtes Kind wie der war keiner.*”）。グンドルフがゲオルゲからうけたものは莫大であり、グンドルフは、

わがなす一切をつらぬき

あなたの心のたえぬ脈がひびく。

と歌っている。グンドルフはこうして、クライスの中で始めて、ゲオルゲを *Meister* の名をもって呼んだのである。同年の友の間にあったゲオルゲが、ここで決定的に若い友の上に立つこととなる。門弟主義（*Jüngertum des Kreises*）としていろいろ問題にされ、誤解もうけたことだが、とにかくこの言葉は友情（*Freundschaft*）以上のものをさす点で、あたっている。グンドルフの対ゲオルゲ関係は、献身の一語につきる。師は神の口であり、告知者であり、無限にして完全であるから、従順というよりももっと大きな、とにかく、超人間的な奉仕なのであった。以後このような関係がクライスの若い人々の間でひろがっていく。ビンゲンの町のゲオルゲ遺書類をみると、いかに若い人々が情熱をもって彼を求め、彼に奉仕したかを、よく感じることができる。どの人もみな美しい手書で詩を書き、立派な装釘で、心からの文をそえ、ゲオルゲに捧げている。

だがこのような交りは容易な道ではなく、亀裂なしとはしなかった。すでに二度目に会った時、ゲオルゲはグンドルフに次のような詩を与えたが、それはグンドルフの全生涯にあてはまる批判のようであった（上村清延訳）：

グンドルフに

何とともかくも遙けき人々を研究し

そして伝説に読み耽るのか、

もしもおん身が自身で一語を創造し、

いつしかこう云われるならば—

短かい道の上で私はおん身にとってこうであり

そしておん身は私にとってこうであったと、

これこそはあらゆる勤勉の上に輝く

光明でありそして解決ではなからうか？

この箴言詩がグンドルフのそのごの長い生涯を予言した。とにかくゲオルゲは、常にグンドルフの中にある研究者学者の精神に対抗して、詩人の精神を想わせるようにつとめた。しかし現在、

グンドルフが薄い詩抄を僅か一冊しか残さず、それが詩の歴史にものいうものでないことを考えると、この呼びかけはむなしかったように見える。だが最初、グンドルフは詩人として頭角をあらわした。彼の幸福は、師の賞賛をうける詩が書けるかどうかにかかっていた。彼の誇りは、若干の詩が芸術草紙に出続けたこと、またクライスの刊行物として2度詩集が出たことにあった。一つは *Zwiegespräch*, 他は *Fortuna* という詩集である。彼の中には、強くはないが、優雅で、甘美な詩魂が眠っていた。ゲオルゲの力でそれが呼びさまされて、草紙の号をおうて自己自身に帰りつき、20才になると、独自のリズムと美をもってはや皆の期待が実現されたかのように見えた。だがゲオルゲは満足せず、現実と乖離したところを鋭くついた。そのすばらしい詩句に、力と弱さ、緻密と空虚がまじっている (*Ineinander von Kraft und Schwäche, von Dichte und Leere*)。詩の内容に対して、奇妙に遠くたっている。自我 (*das Ich*) でなくて、彼の中の漠とした何か (*ein es in ihm*) が詩作している。あるいは他のすぐれた詩では、思考的なもの (*das Gedankliche*) が大きな場をしめて、真の重みに欠けている。要するにグンドルフのどんな傑作にも、軽快な遊動が過ぎ、力強い掴み方に欠けて (*einzuviel des leichten Spiels, ein zuwenig des kraftvollen Zugriffs*)、魂の飛翔が妨げられている、というのがゲオルゲの鋭い批判なのであった。私達はグンドルフの精神について、実現されなかった詩精神といってさしつかえないであろう。なぜグンドルフの詩精神が実現されなかったか、という理由はいいろいろあるだろうが、ここに見られるような詩の短所、過大な論理体験とか少い形象性とか、その根底になっている創作外の仕事とかが大きな原因になったことはいうまでもない。

詩人グンドルフについて語ろうとすれば、翻訳者グンドルフについて語ってしまう。その翻訳はもはや自分のものか、ゲオルゲのものか、自分の作か、対象作家の作か、わからぬものとなってしまうほどのものであった。彼の導きの星は、若い時からシェイクスピアとゲーテであった。この訳業と研究における二人の協力は著しいもので、一つ一つの詩句の美をグンドルフはどれほどゲオルゲに負うたかはかり知れない。シェイクスピア訳の序に、グンドルフはこう書いている：「新しい詩精神を授けられた訳者自身は、必ずしもシェイクスピアの言葉に倒達するに充分な力を持てはなかった。極度に緊迫し、重みを加え、切実さを増した箇所では、今日の師（マイスター、ゲオルゲ）自身の協力がどうしても必要だった。」ゲオルゲはこうして、グンドルフに新しい息吹を与え、高め上げたので、グンドルフ＝ゲオルゲ＝シェイクスピア訳業が成立した。グンドルフはドラマ全部を、ゲオルゲは全ソネットを訳した。同じ高みにある詩人が、同じ刻印を押された性格が、同じ括りをもつ魂が、翻訳しうるのだ、というのがゲオルゲの単純明確な翻訳論であった (*Nur der Dichter gleichen Rangs, der Charakter gleicher Prägung, die*

Seele gleichen Raumes)。これはしかし、グンドルフの学問的危機をのり切るには、こうするほかないという、一種の応急策でもあった。周知のようにシェイクスピアの定訳としては、アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲル（1767—1845）の17篇の翻業があり、更にこれがティークの指導下にその娘ドロテア及びバウディシンによって継承され、完結をみ、不朽の業績となっていた。シェイクスピアはこれによってドイツの作家となったのであり、グンドルフ自らも、長いシェイクスピア撰取の歴史をあとづけて、それを終点として結んでいる。ゲオルゲとグンドルフが新しい詩精神で、これにいどめるといったのも暴挙ではなかった。ザーリンがいうには、グンドルフ訳の方が、原典により近く、現実感とギリシャ感にあふれ、豊かな色彩、崇高なパトス、厳しい形式、しぶい冷徹さにおいてよりまさっているということである。（残念ながら訳書は私の手に入らない。）グンドルフは読み物としてでなく、息として、話し言葉から訳そうとしたので、この点でシュレーゲル以上に出ることができた。だが、ザーリンの認める通り、この訳業は情感に欠け、高い教養人向きで、上演に不適当とされた。とにかくシュレーゲルの方が、より有利な社会的基盤に立っていた。そこでは現代文学の不毛の対立性がまだ少なく、浪漫派の文化が広い国民層にしみ通る余裕があった。最近出た東独のレッシング学者パウル・リラはシェイクスピア訳業についてのエッセイを書き、そこでグンドルフ訳の欠陥にふれているが、大体ザーリンの指適と同じである（Paul Rilla, Essays. Henschelverlag. Berlin 1955）：「グンドルフのテキストは俳優には不適当だ。ゲオルゲの手腕が介入しすぎて、美的にすぎる。しかしグンドルフが大シュレーゲルを十分に尊び、その言語価値を畏怖していたことがよく伺える。」（ジャイメはグンドルフがすべてあらたに訳したのではなく、原典と照らしてシュレーゲル訳の改良をはかった点が多いといっている。）リラの所説は別として、詩人グンドルフという点からみると、この訳業がグンドルフのプラスになったであろうか。私達はこれを否定的に考えざるを得ない。このような大詩人の、しかも野心的な大業企画は、やはり創作に悪結果をもたらすであろう。ゲオルゲが自らをソネットに限っているのは賢明である。翻訳は創造者にとって、常に害悪を流す方が多いのではないか。受容者にとってはむしろ逆の場合が多いと思われるのであるが。

それよりもわれわれは、彼がハイデルベルク大学教授として活躍し始めたことに注目すべきであろう。これによって彼の詩人としての運命はもっと損われることにならざるを得なかった。ゲオルゲはこの危険を早くから予知し、それに対抗する力をグンドルフからかり立てるように、できるだけのことをした。結婚に反対したときも、結婚したらすぐ Herr Professor になってしまいうから、という理由からであった。彼が学問と詩作の混同に傾こうとしたので、ゲオルゲは彼が本質的なテーマと素材に一切を限定するようにし向けた。というのも彼の心はエンサイクロペディア的で、完全な智にあこがれ、講義テーマを並べたて、読んだものをすべてそのもとに変形整理

するという風であつたからである。一日中図書館で過ごし、諸時代と諸国民の智識をあつめたが、どんな場合でも、自分の創造的思考と表現を役立てた。彼のいうことには、芸術作品のもつ妥当性のような香り (ein Hauch der Gültigkeit des Kunstwerkes —ザーリン) があつた。そこで人々は彼のいうことに抵抗しえなかつた。ゲオルゲの忠告で彼が継承したテーマは二つであつた。それは浪漫派及びゲーテであつた。ハイデルベルクのゲオルゲクライスはいつもこの二つの講義を聞いた。これがクライスの考えに大影響を与えたことはいふまでもない。しかしグンドルフの講義は、いつも自己自身との対決であつた。ゲーテやゲオルゲに帰依しつつ、彼の血には、反面最も浪漫的な流れが脈打つていた。もしゲオルゲに出会っていなかったら第二のハイネになつていたであろう、と述懐している (…wäre ein zweiter Heine aus mir geworden!); 浪漫的な素質と反浪漫的な意志が彼の学問で結びつた。自分になつてゐるシュレーゲル像は、余り彼にとって重要ではなかつたが、反対に彼から遠いシュライエルマッヒャー像は立派な研究にすることができた。彼がハイネを不当に評価したのもこのことと同じであるといえるだろう。だがこのような主観性は、反面、人間の純粋さや忠実さをあらわす。彼には一つの掟がある。彼は巨匠でない自分を思うにつけて、巨匠への帰依を絶対視した (Wer sich nicht Meister weiss, der lerne Diener oder Jünger sein.)。彼はマイスターであるもののみを求め、それによって自己自身の中の敵と戦つた。「私はゲーテが私にのみうちあけたことを知っている。彼の歩み、香りについて、書物が語る以上のことを知っている。」「私は若いゲーテを全く親しい友人にしている。」彼はこういう、一種の憑かれたような状態からゲーテ論を書いた。ここで彼は体験そのもの、素材そのものから語る。内面の知恵から、心の底から、現代のゲーテを捉えるのだ。ゲーテが生き、語り、見る力をそのまま生きるのだ。人々はこれを英雄崇拜といつた (Heroisierung)。デュルタイから始めてグンドルフに至る文芸学は、現今もはや古いものとされているが、真の英雄を高い本質において直観し、われわれの人間性のかたとするのには、これ以外の方法があるだろうか。反対に現代の文芸は、このような畏敬と愛にひどく欠けている。もしわれわれが対象と同一の偉大さにないなら、弟子になり切るほかない、という考えで、グンドルフはゲーテに迫りつゝいた。従つてこのような原則はゲオルゲ風だといへども、この書成立の鍵は、ゲーテへの肉薄そのものにあるのである。多くの人はこの書にゲオルゲ学の範をみたが、それはゲーテに近づく情熱からおこつたといわねばならない。このような人間の偉大さの追体験に基づく学は、1911年の「シェイクスピアとドイツ精神」、そののちの「シェイクスピア、その本質と作品」によつても樹立されてゐた。前者はクライス最初の学術書であつて、かつ文学で不朽の地位を占める名著である。ゲーテ論は1916年、ゲオルゲ論は1920年に刊行された。こうしてグンドルフは学問に新生面をひらいたが、その代り、詩作において大いに力をそがれることとなつた。文芸学に創造を、創造に

文芸学を持ちこむこと、いわば文学の文学というべき方法が、文学と創造の両立、その二元性を不能にしたのであった。グンドルフは文学のための文学、創造のための学問、いわゆるエッセイの精髓をつかめなかった。文芸の抽象語を自由に操る彼の技法は、決して詩作と学問の二元性を可能にしてくれなかったのである。なぜグンドルフが、ヴァレリイやエリオットのような、知的エッセイストになれなかったのだろうか。これはドイツ人の徹底した性格のなすわざであろうか。完全な詩人か、完全な学者か、いつれかに赴かねばやまないゲオルゲとグンドルフのドイツ人らしい動きをわれわれはここに見るのである。

第一次大戦はグンドルフの健康状態を大いに損ねた。彼は急に往年の力を失ったかのようにみえた。ゲオルゲのように冷徹に現実を見つめ得なかったグンドルフは、あくまでもドイツの勝利を望んでやまなかった。もしわれわれが勝てなかつたら、全世界史に意味がなくなる、というように迄考えた。彼は献身的に戦争に仕え、1918年肺炎を患って帰郷、癒えてのちはもとの完全さに戻れなかった。この時代の詩作には、もとの生彩がなくなってしまった。春の歌の中にも、逃げ道のない悲哀と重苦しさがただよっている。感受力はしかし決して衰えてはいない。涙を流して、ゲオルゲの劇詩、聖堂炎上を読んださまが、ザーリンによって精細に報告されている。この詩の予言によって彼は希望のない絶望感につきおとされた。自分が積み重ねた学問も、師の厳しい精神によれば、火をつけて焼かれても仕方のないもののようであって、あとには青春の希望も人生の愛もついていた形骸が残ったのみではないか。彼は自己自身のデーモンとの戦いに疲れて、肉体と精神の力が手にとって衰えたように感じた。ところで青年から大人への通常の成長を辿ってこなかった彼に、常に女性が大きな役割を果たしていた。常には恋愛に寛大で、神聖さが侵されぬ程度に共に悩み、喜んでいたゲオルゲが、グンドルフが女性同伴でくると拒んだ。燃えやすい彼をゲオルゲは戒めた。グンドルフはゲーテを書いた時は、秩序を乱す女性的なものを自ら遠ざけ、異った生活圏からくる混合を戒め、女性の危険を脱していたが、今度はそのせきが切れてしまい、愛されている人間の悲劇が生じることとなった。ゲオルゲもひどく悩んだし、グンドルフも楽園から追放される者さながらに師への忠誠を誓ったが、女性かマイスターかの二者選一の難問の盃はとりされえなかった。そうなればグンドルフを失ったも同然だ (**Dann hab ich den Gundalf verloren**) とゲオルゲは重々しい気分でグンドルフ結婚をおそれたが、防ぐすべもなかった。ザビーネ・レプシウスは、ゲオルゲが女性執筆者を好まず、カントロヴィッツが加った時も女性の仕事は例外的とみていた、と伝えている。クライスの若い学者詩人、ペルトルト・ヴァレンチンはヴァインケルマン論でこうのべている (ショーナウアー) : 「男性間の情熱は根源的な力であり、男が女に向う時とは違って、精神の中で生産したのである。そしてその子は、偉大な見渡しえぬ行為であることが多かった。それゆえにルネサンスのころからこのような友情は、英雄的友情と

よばれる。一方女性に向う愛は、高められたものでも、その自然からして、子供の生産においてみたまわれるのである。」結婚は男性にとって必要ではあるが、よき後継を設けるためにのみ必要なのだ、とゲオルゲは考え、自らの精神の国に女の必要を認めなかった。ゲオルゲはこういった：「もう国の中で仕事がないと思うようになれば結婚すればよろしい。」あるいはニーチェの言葉を愛用して、「彼は結婚した、彼はわれわれのものではない（Er verheiratet sich, er gehört nicht mehr zu uns.）」といった。もちろんゲオルゲのこの不気味な、不正確で割り切れぬところを残す考えは、どこまでも辻妻があわない。しかしながらトーマス・マンのいうように、文学は不正確のしるしをおびた人生の可能形（Dichtertum ist die lebensmögliche Form der Inkorrektheit）ではないか。ゲオルゲが結婚した友人と平気でつきあっていながら、グンドルフにのみこのように厳しかったのは、人それぞれをその高さにおいて判断したなどという説明ですっかり納得いくであろうか。またイーダ・コブレンツとの関係の他、ハンナ・ヴォルフスケールや、ザビーネ・レプシウスとの交友は、合理的に説明がいくであろうか。グンドルフを辯明する友にゲオルゲはこういった：「女性がこんな影響を彼に与えるとは、一体グンドルフはどういうことになったのだろう。彼は人生の分れ路に立っているのですよ。彼は青年の形式と外見を他の人に可能なよりは長く保ってきました。今では男性の形式を見出せるか否かが危いのです。」ともかく常人にはついていけない破局がきた。そしてまさにそのころ、泡立つ修辭と情熱の書、ゲオルゲ論（1920）が書かれたが、詩人に必ずしも好印象を与えなかった。この事件でグンドルフ側はひどい打撃を蒙った。1920年彼はモルヴィッツに、師の保護のまなざしがなくなり、心は麻痺し、絶望的だと書いている。彼をしてまだ地上に止めるものとはといえば、普通の水準の仕事と純粋な研究とであった。これから矢つぎ早やに本が書かれ、印刷され、あたかも夜が始まる前に急ぐべき道を辿る旅人の観があった。まずクライスト論がそうである。クライストの国民的感情の不足を見、根なし草の浪漫性を批判し、ヘルマン戦争を予見的方向としてたたえたこの好著からすら、新しき生(das neue Leben)を汲みとることはもはやむつかしい。「シーザー・その名声の歴史」という大作も、英雄の反照と影のみがあり、指導していく神や人の目標がみられないといわれている。こうしてグンドルフは新しい人間のあけぼのに立たず、古い教養世界のたそがれの中に立つ、ヨーロッパ・ドイツ人文主義の手おくれの最後の姿になった、とザーリンはいつている。こうして時代にとりのこされたグンドルフは、死ぬ迄、気高い人間精神のフマニストだった。怪しい時代に、ハイデルベルクで、生きた魂(der lebendige Geist)の育成につとめる彼のことを思うと、みな慰めを見出したものであった。彼の申し出で大学正面には Dem lebendigen Geist という銘が掲げられた。これが1933年グンドルフなきあとになると Dem deutschen Geist とすりかえられる。このような時の動きに早目に絶望した彼が、教養の世界に立つのみの一種の無力

を感じないわけがあらうか。ドイツという、彼の著とは程遠い理念が狂い始め、教養世界は風前のともしびなのだ。彼の最後の言葉はこういうものであった：「ホメロス以来あらわれて、ニーチェと共に高まったものが、今は終わろうとしている。すなわち自由な全人である。情け深く、高貴で善良な、生きた心から出る個有の存在への勇気をもった、立派な精神の生きものである。」死の直前のゲーテ論では、老ゲーテの次のような言葉が引用されている：「絶望することのできないものは、生きていてはならない (Wer nicht verzweifeln kann, der muss nicht leben.)。」もう数年長生きすれば、ユダヤ人として死の危機に頻したであろうが、ともかくこのような重々しい発言や、ドイツの粗野な空気に耐えられずルーブル美術館をさまよう彼についてのザーリンの描写や、シーザーとゲオルゲの生まれた日に死んだことを考えるならば、何か偶然の死ではないような気がしてくるのである。今数年長生きできで、ヒットラーの行為と衝突する彼を見たいという希いはむなしいようである。というのも 死の年に妻に捧げた詩は、淋しく詩業の失敗をつげるかのようにひびくのみである：

わが青春は 巨匠の手で導かれた、
かすかに それからよろこばしく。
遂に、より強い者となって自己を制し、
より真実に歩み出した。孤児となって
指導、軌道、引づなもなく
ただ神と愛とのみを知って
ゆり動く漂石の間
死のさし示す道を辿る。

付記：初稿校正中にゲオルゲ＝グンドルフ書簡集が出版された。この論文のために参考できなかったことは残念であるが、次の機会にそのうちの重要なものは追加考察したいと思う。